



共に学び・育つための就学相談会をやりました



相談者は6組、うち来春就学は1名

最年長が小学5年生

11月4日(木)、TOKO主催の就学相談会は3年目。会場の越谷市中央市民会館に来て下さった相談者は、6組でした。お子さんの年齢は、最年長が11歳(小5)。次が7歳(小1)。5歳で来春就学が1名。ほかは5歳、4歳、3歳が、各1名でした。主な相談内容を紹介します。

共に学ばせたいが迷う

就学前のお子さんの親たちは、近所の友達やきょうだいで一緒に学ばせたいけれど、通常学級では受け入れてくれないのではないかと、学区内に特別支援学級があればとか、うちの子は特別支援学校と言われるんじゃないかなどと迷っていました。先輩たちは、ついていけるかとか受け入れはどうかと考えるのではなく、地域の子どもたちが本人を知り、本人があるのままで地域の人たちとつきあってゆくことが大事だと伝えていました。

付き添いで悩む

通常学級在学中のお子さんをもつ親たちからは、校外学習等で付添いを求められることへの悩みが語られ

ました。強制ではないといいますが、心理的圧力です。ある意味、強制より辛い。特別支援教育と銘打って、多少でも「支援を受けている」という負い目をもたされているせいです。本来は「支援」という次元でなく、「あたりまえに学校の一員として受け止める」ことが必要です。気管切開の子も共に！

障害児の就学

相談会を開催

あす越谷

障害のある子どもの就学問題に悩む保護者を対象にした相談会が4日、越谷市越ヶ谷4丁目の市中央市民会館で開催される。同じ立場の親や障害者、関係者が助言する。

開催するのは、同市や春日部市を中心に活動する「わらじの会」と、同会で就学問題に取り組み「どの子ども地域の学校へ」公立高校へ「東部地区懇談会(TOKO)」。

同会事務局の山下浩志さんによると、障害のある子どもの就学は、健康診断や保護者との就学相談を経て、市町村教委の就学支援委員会が審議する。昨年の相談会では「普通学級に行くための補助

気管切開のお子さんが、保育所・幼稚園を拒否され、遠くの市の児童デイサービスに母子で通っているとのことでした。狭山市で小・中普通学級で受け止め、高校生活も市として支援者を派遣した例があります。私たちの地元でも、一緒に育ち、学べるよう共に考えてゆきましょう。

員をお願いするつもりで就学相談に行ったが、希望を聞かれず支援学級を勧められた「などの相談もあったという。

国連では4年前、「障害者の権利条約」で、健常児と障害児を分けない「インクルーシブ教育」がうたわれた。日本でも、政府の「障がい者制度改革推進会議」が今年まとめた意見書で、「障害の有無にかかわらず、すべての子どもが地域の小中学校に就学し、かつ通常の学級に在籍するのを原則とする」と提言されている。

相談会は午前10時からで、県内全域から参加が可能。資料代500円と昼食が必要。問い合わせは「TOKO」の白倉保子さん(電話・ファクス048-752-735)へ。朝日県版11、3

TOKO が初めてお手元に届いた方へ TOKO を初めて目にした方へ

子ども達を分け隔てなく育てるために

どの子ども一緒に地域の学校へ通えるように

地域へ、行政へ、働きかけている会です

ぜひ、一度のぞきにきて下さい 待っています



「健常児」たちの深い傷

藤ヶ谷 理江(春日部市)



私は数年前まで、フランチャイズの学習塾を開いていました。ですから、子どもたちの本音をちょこちょこ聞くことのできる立場にいたかな、と思っています。

それは、6年生の男子ばかりが5、6人ほどのクラスで起こりました。彼らは幼稚園のころからの友達同士で3学年時に一緒に入会してきたメンバーでした。その中に、友達からよくからかわれているA君がいました。A君は論理的な思考の得意な子でしたが、少々落ち着きがありませんでした。その日も何かKYなことを言ったのでしょうか。となりにいたB君がすかさずこう言いました。「うっせえんだよ！てめーみてーなバカは特学に行け！」

私は一瞬凍りつきました。そんなことを言ってはいけないと注意しようとしたのですが、すぐに言葉が出ません。何をどう言ってよいのか…。しばらく固まっていたような気がします。その間にもほかの子たちが「そうだよ、特学に行けよ！」と口々にA君をからかいだしてー。

私はやっと我に帰り、「特学の子たちはみんながんばっているんだよ。そんなふうにはいけないよ。」と、たぶん、そんなことを言った

と思います。ただ、その時はいつも大人しいC君が「そうだよな。コイツが行ったら、特学のほうが迷惑だ。行くな、行くな。」とチャカしてくれたので、少し救われた気がしたのです。

当時、私は郁美の就学のことで悩んでいるまっただ中でしたから、子どもたちのそのセリフはまさに突き刺さるような感じられました。実はその後も「特学」は友達をからかう時の言葉として、特に高学年の男子によってよく使われたのです。それは本当に安易に使われていました。その軽さが、よりシビアな現実を物語っていました。「結局、障害児はバカにされるんだな。」ということのを再認識させられたわけです。

しかし、冷静になって考えてみると、B君のセリフは特別支援教育の「ある大きな問題」を示唆しているのではないかと、思いました。子どもたちがお互いにバカだガイジだと言い合うことは、決していいことではありませんが(いきすぎは絶対いけないことですが)、ある程度は仕方のないことなのかなと思うのです。なぜなら、誰の心の中にも多かれ少なかれいじめや差別というものはある、道徳や教育で完全になくすことなど不可能でしょう。しかし、特別支援教育という「場所」の問題はそういうことではないのです。

「分けられる場所」の存在は、小さな差別の心に裏づけを与えてしまっているのではないかと…そう思えたのです。「へんなことを言ったり、やったりする連中は分けていいんだね。だってそういう場所があるんだから…。」子どもたちは6年かけてそんなことを学んでしまったのでしょうか？学校はその姿を通していったい何を教えようとしているのでしょうか？そう考えると、私はショックを通り越して、怒りも通り越して、とても悲しくなりました。そして特別支援教育の場で、どんなに立派な障害児教育をおこなっていようと、子どもたちががんばっていようと、「分けられている」という事実は変わらないのだと確信しました。

私の通った小学校、中学校には特学はありませんでした。近くに養護学校もありませんでした。ですから私にとって、これが現実の特別支援教育との最初の出会だったのです。そして、これは障害児側からのではなく、普通級の障害のない子どもたちからの強力なメッセージだったのだと思います。

以上が普通級にこだわった理由です。支援学校適で重度の知的障害児を普通級に入れたわけですから正直、相当の覚悟をしていました。しかし、案ずるより産むがやすし。大したトラブルもなく、6年生まで来てしまいました。もっとも給食、校外学習、プールには付き添いましたから、それが大変だったといえば大変…でも付き添いにもれなくついてくるお友達とのコミュニケーションは、今でも楽しみです。

先日運動会がありました。心配していた組体操ですが、がんばっていました。先生の的確なご指導と、お友達の協力でこんなにニコリポーズをキメることができました。本当に皆さんに感謝、感謝です!!

迷いながら 慣れながら 周りと一緒に

松本 みゆき(越谷市)

○保育園へ

息子の渉(ワタル)はダウン症、いま11歳。平方小学校の五年生で通常学級にいます。

生まれた時は春日部市に住んでいて、私立の三愛保育園に三歳から入りました。五歳の時に今の越谷市平方に越してきました。保育園は、そのまま三愛保育園に通いました。

越谷市に越してきてから、親の会の人に教育相談所のことを聞き、月に一度通所しました。内容はトランポリンやマットなどを使って体を動かしたり、簡単な工作をしました。その時から就学先は学区の通常級に行きたいと言っていました。

●就学間近

就学間近になってくると、発達検査を受けました。これは初めて教育相談所に来た時にも受けたもので、どのくらい成長したか確認するもの。と言われたような気がします。そして所長と面談があり、通常学級に入りたいことを話すと、理由を聞かれました。「いま近所のお友達と仲良くしているので同じ学校に通わせたい。本人も一緒に行くのを楽しみにしている」「越してきて間もないし、保育園も春日部に行っているのです、地域の小学校でお友達を作りたい」と答えました。

すると、保護者の意見を尊重するので通常学級に入ることはできるが、本人が入ってみて辛い思いをするんじゃないか、二次障害を起こしてしまわないか心配と言われました。また、お友達関係も、今はみんなゲームで遊んでいるから期待しない方がいいと言われました。そして発達テストの結果は「養護判定」と言われました。

○学校見学

思い返せば、渉を出産後に、産後を心配していた私の友人に「ダウン症だった」と告白して「ダウン症って何?」と聞かれ「普通の学校には行けないかもしれない」と言ったことを思い出します。私は、強い信念を持って通常学級がいい!と選択したわけではありません。ギリギリまで迷っていました。支援学校、支援学級を見学して、特別な環境に違和感を感じ、渉に合った場所なんて見付けられずに、どうなるかわからないけど学区の通常学級を選択しました。また、やっぱり無理そうなら移ればいいのかという思いもありました。

●就学時健診

学校から就学健診の案内が届き、受けに行きました。受付をしていた先生に、ダウン症であることを伝え、私も一緒に同行することにしました。知能テストまで終わると個別で再テストがありました。テストが終わり、入学説明会での資料やバザーの案内をもらって帰りました。

○入学申込書

バザーの時に入学申込書を提出しに行き、その時に校長先生に会いました。「この子には生まれつきのハンデがあるがみんなと同じようにこの学校に通わせたい」と話しました。校長先生は「うちの学校には軽い学習障害の子はいるが、重い子はいない。特殊学級があるのは隣の桜井小ですよ」と言われました。「もちろん承知しているし、見学にも行ったが、やはり地域の中で育てていきたい。健常児の中でたくさん刺激を受けながら、成長させたい。もし、平方小に特学があったとしても通常級を希望しています。」と言うと、もうそれ以上何も言われませんでした。

●入学式

入学通知書が届き、担任になる先生から電話をもらいました。就学健診の時に再テストを担当していた先生でした。春休み中に、もう一度学校に挨拶に行くことにしました。担任になる先生はダウン症の生徒を受け持ったことがあるベテランの先生とのことで平方小のコーディネーターでした。そして「教育委員会にお願いして、補助員が付けられるようになりました。」と言われました。

入学式での渉は、先生に手を引かれ元気に入場。名前を呼ばれ、元気に「はい!」と挨拶をしたまでは良かったのですが、しばらくすると飽きてしまったのかアンパンマンソングを熱唱し、体育館を端から端まで闊歩していました。その姿に1日にして有名人になったんじゃないかと思えます。

○登校班

次の日から、登校班に付き添って教室まで送っていました。周りの子供たちから注目され、仲が良かった近所の子も一緒にいると目立つため離れてしまうように...さみしい思いもしましたが、数日で周りの子供たちも慣れ、みんなから可愛がられるようになりました。

●付添い

しかし、渉も慣れてくると教室を脱走し、校内を出歩くようになりました。担任から補助員がいない2日間、付き添いをお願いされました。大人が手を貸してばかりの日常では普通級に入った意味がないのでは?と悩んだりもしましたが、学校での様子やお友達関係、渉の通訳をしたり、今では良かったかなと思えます。というの

も、2学期の途中で二人目の妊娠を理由に付き添いを外れたから言えるのですが...

○ボランティア

付き添いを外れた時、担任から「今までずっとお任せしてたので、てんてこまいの1日でした」と嘆かれました。できることならイスに縛っておきたいと...。お母さんが来れないなら、他にお父さんやおばあちゃんは来ませんか？と言われました。主人の仕事休みが合う日は、行ってもらうようにしました。でもそう合う日ばかりではありません。すると学校の方で社協にボランティアを募集しました。そして、五人のボランティアの方が交代で来てくれることになりました。

●支援員

支援員は毎年変わっていたので、進級の度にまた一から信頼関係をきづいていくという感じでした。渉は相手を試すような所があるので、誰でも最初は追いかけてこ状態になります。三年生の時の支援員は「隣の席で勉強を見てればいいと言われてきたのに教室にいないんですけど、どうしたらいいですか？目が離せないの、トイレにも行けないし、お茶も飲めない。自分の子供は女の子だったので、男の子はよくわからない」と言われました。でも、慣れればなんとかなるものです。

○支援員の休み

その支援員が冬休み明けに、単身赴任していたご主人が帰宅するので数週間休むことになり、その間お母さん来れませんか？と担任に言われました。下の子(一歳)も一緒に行くことになると言う、それでもいいというので行くことにしました。

でもその日は書き初めの時間があり、ハイハイをしている下の子を抱えての付き添いはとてつもなく大変なものでした。担任の先生も一人で大変そうだし、休みの間代わりの支援員を入れてもらえないか教育委員会に私から連絡しましょうか？と提案し、連絡してみました。

●教育委員会

すると、校長先生から連絡があり、支援員の休みの件は教委に連絡していないことだったとのこと。付き添いは担任が軽い気持ちでお願いしてしまった。支援員は休みがもらえないのであれば辞めるしかないと言っていること。新しい人だと渉が打ち解けるのに時間がかかってしまうから、今の先生に何とか続けてもらう方がいいと判断した。

でも教委からの連絡で代わりの支援員を手配してもらえるようになりました。と言われました。日頃からTOKOで教委との話し合いの場を提供していただいたお陰で、迅速な対応をしていただきました。

○支援籍

三年生の時に、支援籍が取り入れられ、支援学校から渉の自立活動の指導をしに月一回先生が来るようになりました。平方小にある個室で1対1で一時間です。四年生からは、月二回、支援学校にある自立活動室で指導を受けに行くことになりました。五時間目が終わる頃に学校へ迎えに行き、四時までには支援学校に連れて行きます。同じく一時間ですが「相手に伝える」「相手に合わせる」をねらいの軸として取り組んでいます。動きを取り入れながらだと、活動に飽きがなく、集中が続くようで、充実した一時間を過ごしています。

●林間学校

今年は林間学校があったので、教頭、担任の他に支援学校の先生にも同席してもらい、事前に打ち合わせをしました。いつもの支援員は校外合宿には付いて行けないので、代わりに若い男の先生を二人も余計に引率してもらい、部屋も、もしみんなと一緒に眠れそうもないようだったら使えるように1部屋確保してもらったり、学校側で色々考えて下さって本当に有り難かったです。

本人に至っては、出発の朝、ただならぬ雰囲気を感じたのか、荷物も重いからヤダと言って持たずにグズグズしていましたが、学校に着いてお友だちに会ったら、ボストンバックをガバッと担いでさっさと行ってしまいました。心配していた山登りも、みんなと一緒に山頂に立ち、夜もみんなと一緒に過ごして、とっても楽しかったようです。

○余暇

余暇についてですが、いつも遊んでいるのは、近所の幼馴染みです。夏休みもほとんど毎日一緒にいました。同級生も、いきなり遊びにきたりします。妹(三歳)と一緒に遊ぶようになったので、遊びが広がったように思います。

●地域で

色々ありましたが、地域の学校に行かせて良かったと思う時は、お店や公園、お祭りなどで、たくさんの方が優しく声をかけてくれる時です。渉も「今日遊べる～？」なんて聞いています。周りの子供たちが渉に慣れているので、渉の言葉が不明瞭でも理解してもらえる。困っている時にはそっと手を貸してくれている。それがすごく自然で、渉が生きやすそうだと感じる時です。ただ、渉が人の役に立つ機会がもう少しあればいいな～と思うのですが、なかなか活躍できずにいるのが残念です。

これからも地域で渉が将来生きやすいように、周りの方々のお世話になりながら、ご面倒をかけながら育てていこうと思っています。

すれちがいも楽しんで



春日部 K・U

* 幼稚園の時

ママ友から TOKO のおしゃべり会に誘われ、先輩ママから普通級で過ごし、級友や地域の人たちの理解が深まって卒業後も生活しやすいことなどをお聞きし、共感。多くの級友をモデルに、吸収できるものが多いと思った。

* 低 学 年

1年の担任の先生は、席につけない多動の子を担当したことがあるということで、「色々な子がいますからね」と構えてくれた。うちの娘は席に座ってはいるものの体をゆすったりキョロキョロしたり。会話は一方通行。級友の動きはよく見てまねするので、集団行動は何とか取れ、入学時、読み書きはできなかったのが、板書を写せるようになった。1年の後半、知能テストで特学判定が出た時、先生が「勉強はついていけないけど、色々な面で伸びているのがよくわかります。」とってくれた。級友とはうまく関れないものの皆の言動に触れている内に段々会話ができるように。

* 中 学 年

仲良しの K ちゃんができる。質問大好きな娘の話に嫌がらずに応じてくれる S 君。二人とも、保育園の時、娘に似たタイプの子と関った経験があるそう。構えることなく自然に接してくれるので一緒にいる体験は大事だと実感。反面、避ける子やからかう男子もいて3学期、つねられたりからかいがひどくなり先生に相談、指導してくれた。「宿題は必ずやる！」というこだわりが幸いして、漢字の書き取りや計算、音読は徐々に上達してきた。

4年の担任の先生は、娘にあった課題を用意して、できなさそうな事はさせなかった。「普通級にいて娘にあった指導もしてもらえるなんて理想じゃない？」と思ったが、「皆と同じ事がやりたい!」「個別に指示、強要されるのが大嫌い」な娘にとっては、かなり辛かったよう。クラスで“特別扱い”みたいな雰囲気だったため、級友との壁ができた感じになってしまった。勉強はよく教えて頂き、成果もありました。

* 高 学 年

友達の中でトラブル続出。約束やルールを守れなかったり、KY なので怒られたり。「この時期の女子の言動はきついのが普通だよ。」と中学生の姉からアドバイスを受けつつ、行き過ぎた言動は先生に相談し、援助してもらった。日常会話はできても、耳なれない言葉や微妙なニュアンスが理解できず、自分の興味のある事ばかり聞く娘の特徴をわかって関ってくれる友達は。「意味わかる? こういうことだよ」「えーそれは違うでしょ」「今、話しかえちゃだめ」とか教えてくれることも。会話を楽しんでいる様子。宿題をきちんとやり続け、単純な計算、漢字はついていける部分もできた。

* 最後に

普通級のよい所は多くの級友が、お手本になることです。療育訓練や塾など色々やってみましたが、うちの子には学校で見よう見まねで学んだ事が強制感がなく一番身につきました。集団の生活の流れの中で、コミュニケーション能力が上がると知的な面も向上する事を実感します。ばかにされたり色々ありますが、やり過ごす術を学ぶことも重要かなと。

TOKO No. 158 目次	共に学び育つための就学相談会をやりました	1
特集:通常学級はいま	藤ヶ谷理江 松本みゆき K.U 太田妃早子 熊谷保江 中学1年女子	2
障がい者制度改革推進会議が「全障害児普通学級籍」	9	12月のイベント情報 10

とべ！かいくんジャクソソズ

太田 妃早子(越谷市)

保育所で

こんにちは！ 息子は今 越谷市内の普通級に通う5年生です。

3歳から保育所に通い、健常の子と一緒に過ごしてきました。息子はみんなと同じ様にはできなくても、お友達のやっている事をジーっと見ては真似をし、少しずつ少しずつ色々な事が出来る様になりました。言葉も同じです。親がいくら教えてもダメなのに、お友達の言っている事を真似てしゃべれる様になったり、食わず嫌いで偏食でもみんなと同じ給食だとちょっと食べてみたり・・・それはそれはビックリするほどの成長ぶりでした。集団の中で過ごす影響、お友達の力ってすごい！！と実感しました。

みんなと一緒に決意

こんな幼児期を過ごしてきたので、迷わずこのままみんなと一緒に。子供達の声がたくさんあふれ、好くも悪くも？お手本となるお友達がたくさんいる所へ入れたいと考えました。しかし、話が現実的になってくると、これでいいのか？息子に無理をさせる事にならないか？悩みました。すごく考えました。でも、やっぱり今までの息子の成長ぶり、みんなと楽しくやっている姿を見て、毎年毎年 息子の様子を見ながら考えていけばいいや・・・と思い決心しました。

学校生活はお任せ

入学に関しては何事も無くすなりと入る事ができました。学校生活はすべてお任せし、私は送り迎えだけ3年間しました。今でも心配な事ばかりですが、本人は親の心配なんて何のその、遅いからと迎えに行くとお友達と教室で遊んでたり。。こんな調子で運動会・マラソン大会等すべての行事にいつも満面の笑顔で参加しています。

クラスみんなで考えた

去年のクラス対抗大縄大会では、怖くてなわとびに入る事のできない息子をどんな形でなら参加できるか？クラスみんなを考えてくれました。超高速で1分間に何百回と跳ぶ中、息子が入ったら負けるのは必至。でも、みんなは息子の名前を入れたチーム名まで考え、朝練もしたり頑張りました。1位にはなれなかったけど、本番ではチーム新記録を出しました。クラスみんなのあたたかい気持ちが本当にうれしくて、今でも思い出すと涙が出てきます。

山登りも達成

そして、今年は2泊3日の自然教室に行き山登りも達成！大きく大きく成長して帰って来ました。お土産もいっぱい。。家族みんなにそれぞれ考えて買って来てくれました。

毎日の中で、本人も大変なことはたくさんあると思います。でも、先生方、お友達の力をかりながら 時間もかかるけど、みんなと同じように学校生活を送っています。

たくさんの人の中で

私も迷う事ばかり、でも お母さん方から「かわいいよね〜」「頑張ってるね」「成長したね」と、嬉しい言葉をたくさん掛けていただき力をもらっています。

息子は、たくさんの方々に支えてもらい頑張っています。



なぜ普通学級にこだわるのか

熊谷 保江(川口市)

就学前に初めて知った

次男は地域の普通学級に通う6年生のダウン症です。次男が生まれた時、この子が成長したら学校は特別支援学校か養護学校に行くことになるのだろうと思っていました。

ところが就学を前にしていろいろな人の話を聞いているうちに、障がいがあっても普通学級に行けるんだという事を知りました。長男や近所の子供達と同じ学校、歩いて通える地域の学校へ行かせたい、たくさんのクラスメートをはじめお友達に囲まれる学校生活を送らせてあげたいと思うようになりました。

たくましく生きていく力を

知的障がいですから国語や算数などの勉強は健常のお子さんのようににはできないかもしれませんが、学校は集団の中でのルールや人間関係を学ぶ場でもあると思います。将来、社会に出た時のことを考えると、障がい児ばかりの学校やクラスよりも、より本当の社会に近い環境で育つことが我が子のためになると思いました。とにかくたくましく生きていく力をつけてやりたかったのです。

地域の子ども達にとっても

また地域の小中学校には特別支援学級がありませんので地域の子供達は障がいのある子供達と接することなく成長してしまうかもしれません。そうした人の中には障がい者とのように接したら良いかわからない、言葉は通じるのだろうか、声をかけたら何かされるのではないかとって積極的に関わる気持ちになれない人もいるかもしれません。

小さい頃から地域で健常児も障がい児も共に学ぶことでそうした誤解もなくなり、障がい者に対して理解してくれる人が増えてくれたらうれしいです。

いじめや迷惑の心配

このようによくよく考えて決めた就学先ですが、実際に就学するとなると本人や長男がいじめにあったりしないだろうかとか、我が子のためには良くて、お友達の勉強を邪魔したり迷惑をかけるのではないかなど心配はつきませんでした。

ですが入学してみるといじめなどはなく、むしろ同級生をはじめ上級生も親切にしてくれる人が多く、長男などは弟のことを人気者でうらやましいとまで言うていました。低学年の頃はお友達との小さなトラブルもありましたが、年々お友達との関係も良くなっているように思います。よく普通学級は低学年のうちはいいいけど、それ以降は難しいと言われますが、我が子の場合は4年生頃からいろいろな事が出来るようになってきたようです。

通学路の有名人に

先生も授業の邪魔というよりも、おもしろい事を言ってクラスの雰囲気をよくしてくれますと言って下さり、お友達のお母さん方も我が子のような障がい児と一緒に学ぶことはお互いに良い事だと言って下さる方も多く、応援してくれて心強いです。

また学校の帰り道は通学路にある工場、アトリエ、車イスのおばちゃん家など何箇所も寄り道をして帰ってきます。毎日通学しているうちに挨拶がきっかけでいろいろな方と知り合いになったのです。歩いて通える学校ならではのですね。

何よりも地域の人達とふれあう事ができ、暖かく見守ってもらいながら育っているんだなあって最近になって実感しています。



最高のお向かいさん



中学 一年 女子

私のお向かいの空き地に渉君一家が引っ越してきたのは、私がまだ幼稚園の年長の秋で、弟は三才の時でした。初め、渉君の家を見たとき私は、随分大きな家だな。と思いました。

そして何日か経ったら私の家に髪が長くて若い女の人に来て、玄関で母と話していました。後で母が、「お向かいさんのお母さんだよ。」と教えてくれ、この人が後に“渉君のお母さん”と呼ばれ、私の友達のような存在になる人でした。

何日か経って、母と弟と私で渉君の家を訪ねました。そして出て来たのは髪の長い女の人だけではなく、私より少し幼い男の子もいっしょでした。何分か母達が話している間に、私と弟と渉君の三人は遊んでいました。

その時、私が気が付いた事は、「渉君の話している言葉が聞き取れない」という事でした。

当然私は幼稚園でもたくさん話しているし、言葉が聞き取れない事はそれまで全くありませんでした。

だからすごく驚いて母に聞くと、「初めは分からないだけでしょ。」と、言われました。

その後何年か経ち、私は渉君がダウン症だということを知りました。聞き取れなかった言葉もそのせいでした。でも今はそんなことも忘れてます。もう言葉も分かるようになりました。

弟は遊びに行く度に渉君とゲームをして遊んでいて、夏休みや冬休みの一行日記には、“渉君と遊びました”でうまっているほどでした。

私もたくさん遊びました。ときにはお泊りしたり、お昼ご飯を一緒に食べたり、ピクニックや公園にも行きました。

そしてある日渉君は、“にいに”になりました。渉君の妹、一夏ちゃんが生まれたのです。私や弟や母は、いっちゃんが可愛くて仕方ありませんでした。私は四年生でもう一人家族が増えたような気がしました。

今はいっちゃんはペラペラ話しています。そのいっちゃんも今はお姉ちゃんになりました。渉君、いっちゃんの妹、葉奈ちゃんが生まれたのです。

渉君一家が引っ越してきた時は三人家族だったのに、いつの間にか五人家族になっていました。

そして渉君は平方小学校でも偏見をもたれることもなく、「わたちゃん」と呼ばれ、とても楽しく学校に通っています。ただ、授業にはあまり出ずにお付きの先生にいつも付いてもらっています。

私は渉君がみんなに“障がい者”という一つのくくりではなく、一人の人間として見てもらっていることがすごく嬉しく感じています。

さて、私が渉君の家に遊びに行つてすごく楽しいことは、渉君のお母さんと話している時です。話す内容は学校のことや、いっちゃん、渉君のこと、家であったことなどです。中でも私が話していて楽しい内容は、いっちゃんのおもしろい言動を教えてもらうことです。

いつの間にか、渉君のお母さんはおもしろいことをたくさん話せる友達のようになっていたのです。私はこんなに最高の「お向かいさん」が居てすごく幸せです。これからも変わらず仲良くしていきたいです。

(松本渉君とその家族の生活史を描いたこの文章は、人権作文入賞作品に選ばれました。)

内閣府の下に設置された障がい者制度改革推進会議が「全障害児普通学級籍」を

障害者権利条約批准に向け、国内法の見直しをする「障害者制度改革の推進のための基本的な方向（第一次意見）」を6月に提出。その中で、教育分野では土屋埼玉県前知事が2003年に提唱した「全障害児普通学級籍」の方向をまとめました。

【推進会議の問題認識】

障害者権利条約においては、あらゆる教育段階において、障害者にとってインクルーシブな教育制度を確保することが必要とされている。

障害の有無にかかわらず、それぞれの個性の差異と多様性が尊重され、それぞれの人格を認め合う共生社会の構築に向け、学校教育の果たす役割は大きい。人間の多様性を尊重しつつ、精神的・身体的な能力を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加するとの目的の下、障害者が差別を受けることなく、障害のない人と共に生活し、共に学ぶ教育（インクルーシブ教育）を実現することは、互いの多様性を認め合い、尊重する土壌を形成し、障害者のみならず、障害のない人にとっても生きる力を育むことにつながる。

また、義務教育だけでなく、就学前の教育、高校や大学における教育、就労に向けた職業教育や能力開発のための技術教育、生涯教育等についても、教育の機会均等が保障されなければならない。

なお、現行の教育基本法の第4条第1項の教育上差別されない例示に「障害」が明記されていないところであり、「障害」が除かれる趣旨ではないものの、今後明文化することも検討すべきである。

【地域における就学と合理的配慮の確保】

日本における障害者に対する公教育は、特別支援教育によることになっており、就学先や就学形態の決定に当たっては、制度上、保護者への意見聴取の義務はあるものの、本人・保護者の同意を必ずしも前提とせず教育委員会が行う仕組みであり、本人・保護者にとってそれらの決定に当たって自らの希望や選択を法的に保障する仕組みが確保されていない。

また、特別支援学校は、本人が生活する地域にないことも多く、そのことが幼少の頃から地域社会における同年齢の子どもと育つ生活の機会を失わせたり、通常にはない負担や生活を本人・保護者に求めたり、地域の子どもたちから分離される要因ともなっている。

障害者が地域の学校に就学し、多大な負担（保護者の付き添いが求められたり、本人が授業やそれ以外の教育活動に参加しにくいまま放置されるなど）を求められることなく、その学校において適切な教育を受けることを保障するためには、教育内容・方法の工夫、学習評価の在り方の見直し、教員の加配、通訳・介助者等の配置、施設・設備の整備、拡大文字・点字等の用意等の必要な合理的配慮と支援が不可欠である。

このような観点から、以下を実施すべきである。

- ・ 障害の有無にかかわらず、すべての子どもは地域の小・中学校に就学し、かつ通常の学級に在籍することを原則とし、本人・保護者が望む場合のほか、ろう者、難聴者又は盲ろう者にとって最も適切な言語やコミュニケーションの環境を必要とする場合には、特別支援学校に就学し、又は特別支援学級に在籍することができる制度へと改める。

- ・ 特別支援学校に就学先を決定する場合及び特別支援学級への在籍を決定する場合や、就学先における必要な合理的配慮及び支援の内容を決定するに当たっては、本人・保護者、学校、学校設置者の三者の合意を義務付ける仕組みとする。また、合意が得られない場合には、インクルーシブ教育を推進する専門家及び障害当事者らによって構成される第三者機関による調整を求めることができる仕組みを設ける。

- ・ 障害者が小・中学校等（とりわけ通常の学級）に就学した場合に、当該学校が必要な合理的配慮として支援を講ずる。当該学校の設置者は、追加的な教職員配置や施設・設備の整備等の条件整備を行うために計画的に必要な措置を講ずる。

【学校教育における多様なコミュニケーション手段の保障】

障害者の人格、才能及び創造力並びに精神的及び身体的な能力を可能な限り発達させるためには、教育が本人にとって最も適当な言語並びにコミュニケーションの形態及び手段によって行うことが確保されなければならない。

このような観点から、以下を実施すべきである。

- ・ 手話・点字・要約筆記等による教育、発達障害、知的障害等の子どもの特性に応じた教育を実現するため、手話に通じたりろう者を含む教員や点字に通じた視覚障害者を含む教員、手話通訳者、要約筆記者等の確保や、教員の専門性向上に必要な措置を講ずる。

- ・ 教育現場において、あらゆる障害の特性に応じたコミュニケーション手段を確保するため、教育方法の工夫・改善等必要な措置を講ずる。

【政府に求める今後の取組に関する意見】

○ 障害のある子どもが障害のない子どもと共に教育を受けるという障害者権利条約のインクルーシブ教育システム構築の理念を踏まえ、体制面、財政面も含めた教育制度の在り方について、平成22年度内に障害者基本法の改正にもかかわる制度改革の基本的方向性についての結論を得るべく検討を行う。

○ 手話・点字等による教育、発達障害、知的障害等の子どもの特性に応じた教育を実現するため、手話に通じたりろう者を含む教員や点字に通じた視覚障害者を含む教員等の確保や、教員の専門性向上のための具体的方策の検討の在り方について、平成24年内を目途にその基本的方向性についての結論を得る。

この推進会議の意見に慌てた文科省は、急遽7月から中教審に学校関係者を中心にした特別支援教育特別委員会を設け、特別支援教育はインクルーシブ教育だとする中間まとめを今年中に出そうとしています。推進本部（本部長・総理大臣）としての強い働きかけが望まれます。

かつて埼玉で、共に学ぶを基調とする彩の国障害者プラン21ができ、前知事が「全障害児普通学級籍」を宣言した直後、特別支援教育振興協議会が設けられ、分ける教育を前提とした支援籍と高等養護学校へとねじまげられていった構図とそっくりです。

私たちも、それぞれの市町村、県との協議をさらに進め、「分けるな」という声を国へあげさせてゆければと思います。

勉強会 「分け隔てない埼玉をめざしていまを確認する」

報告1: 埼玉県障害者施策推進協議会この1年

報告2: 障害児の高校進学全国交流集会から

討論: 来年以降の埼玉の取組をめぐる

2010年12月7日(火) 13:30~16:30 与野本町コミュニティセンターで

主催: 社団法人埼玉障害者自立生活協会・埼玉障害者市民ネットワーク・どの子ども地域の公立高校へ埼玉連絡会

現行の埼玉県障害者支援計画は来年度で期限切れとなり、2011年度の施策推進協議会は、この計画の審議が中心となります。

国レベルでは、障害者制度改革が論議されていますが、私たちの求める分け隔てられることへの反撃、具体的には分離教育から共に学ぶ教育への転換は、文科省・教育関係者の圧力によって阻まれようとしています。

また、障害者制度改革推進会議は、当事者を中心としてかばっていることはたしかですが、分け隔てられることが差別だという視点、健全者社会を問う視点は、やはり希薄であることは否めません。

さらに、埼玉県障害者施策推進協議会は、委員が大幅に交替し、かつて「彩の国障害者プラン21」を策定した2003年当時の活気は失われており、今のままでは来年度の計画検討作業の結果、基本理念の「分け隔てられることなく」自体削られかねない危機的状況にあります。

私たちがつむいできた地域で共に生きる関係を、そのまま支援する施策として県に認めさせてきた全身性、デイケア施設、生活ホームなどの制度や、福祉と労働の谷間をこえる職場参加の活動への公的支援など、それなりに積み重ねてきた県との関係も、先が見えなくなりつつあります。

こんな中で迎える来年に向けて、埼玉の現状を確認した上で、私たちのスタンスを、定めてゆきたいと思います。

最後に、障害のある生徒の高校問題は、「共に学ぶ」と「共に働く」、「共に暮らす」の接点に位置し、私たちの航路を定めてゆくための北極星のような位置にあります。つい最近、開かれた全国交流集会のようすや埼玉の現状と課題を共有したいと考えます。さ来年の全国交流集会を埼玉でという提案も受けています。

勉強会「分け隔てない埼玉をめざしていまを確認する」に、ぜひご参集ください。

TOKOミニおしゃべり会

12月10日(金) 10:00~

生活ホーム・オエヴィスで

共に学び・育つための気軽なかけこみ寺、
つらい体験や納得いかないことを共有し、必要なら行政にも声をあげ、互いにパワーを充電するための楽しいひととき。

先輩の親や障害を持つ本人、関係者が
お待ちしております。
どなたもどうぞ！

オエヴィスは、農家の分家を活用したグループホームです。落ち着きますよ。

生活ホームオエヴィス:
越谷市恩間新田 232-3 048-975-1524

二つのおしゃべり会

高校問題おしゃべり会

12月12日(日) 12:00~

浦和パルコ 9F コムナーレ

来春の入試に向け、1月に県教育局と交渉します。その要望書をつくります。高校生活は、その先の生活や仕事の踏み台でもあります。小・中学生のお子さんの親ごさん等へのガイダンスも用意します。

共に働く街を創るつとてい 2010

12月19日(日) 13:00~16:00 埼玉県立大学で 会費 500円

主催・NPO法人障害者の職場参加をすすめる会 048-964-1819